

るの は な

千葉大学医学部同窓会報 第66号 題字 鈴木 五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472) 22-7171内線2012

井出源四郎教授

(昭19卒・病理学)

医学部長に就任

横川医学部長の任期満了に伴う後任選出のため、去る六月二十六日に予備選挙が行われ、さらに同日午後の教授会において本選挙投票の結果井出源四郎教授が新医学部長に選出され、八月一日発令された。

最近数年間の亥鼻台の動きは激しく、学生問題が一応解決の方向をとりはじめる

看護学部の新設、習志野にあった生物活性研究所(旧腐敗研究所)の医学部構内への新築移転、新病院の落成、業務開始といった具合に現象面



だけを眺めても多彩である。大学に問題が山積みでない日はないので医学部長として苦勞しない人はいない。井出医学部長も当然その渦中の人となるわけであるが、さし当っての問題は今まで使ってきた病院を改修し、基礎医学研究室が移転し、臨床教室の研究室部門と共にこれを利用しようとする懸案の解決である。幸いに、この問題処理のために構成されていたいわゆる「井出委員会」の委員長であった新医学部長は、その経験を生かして存分の活躍をしてくれ

ると思う。西千葉の大学本部との関係や、成田空港開設に伴ない大幅に変転しそうな県や市の動きとの関連についても充分な配慮のもとに意味ある交流をすすめることも期待したいところである。

るの は な 同窓会の活動には永年にもわたり大小さまざまな貢献を重ねて来てくれた方であるので今後とも従来に増した緊密な関係を打ちたててくれることとてである。一つ一つしっかりとやって行きましようと思ひまに、しかし明瞭に抱負を語った井出医学部長の顔には、それな

本間 三郎教授 (昭21卒)

日本学術会議会員当選

本間教授は次のような御挨拶を本紙によせられた。御活躍をお祈りする次第である。

同窓会の皆さんのあたたかいご支援で第一期の日本学術会議会員となりました。この紙面を借りまして厚くお礼申します。総理大臣を議長とする科学会議に日本学術会議議長はそのメンバーの一員として出席します。同会長を通じて間接的ではありますが、科学振興の

りの決意がうかがわれた。
井出医学部長の略歴を記せば、大正九年九月七日長野県に生まれ、旧制松本高等学校より本学に入り、昭和十九年卒。今は亡き瀧澤延次郎教授のもとで病理学を専攻、昭和三十一年に助教、四十年に肺病研究施設の教授となり、四十三年に第一病理学教室の教授に移って今日に至っている。

昭和五十三年度

るの は な 同窓会総会開催

昭和五十三年度るの は な 同窓会総会は六月十七日午後、新病院三階第一講堂で開催された。有益常任理事司会のもとに、大塚会長、香月学長の挨拶があり、佐藤病院長よりは新病院の紹介が、井出副会長よりは医学部近況報告があった。議事に入り昭和五十二年決算、五十三年度予算案等が承認され、百周年記念事業の継続についても報告があった。

本年度総会の特色は、井出副会長の骨折りで高田博厚氏を迎えて講演会をもったことである。七十八歳のお年ながら近年ますます精力的な製作を続ける氏は、彫刻家としてばかりでなく、評論家、思

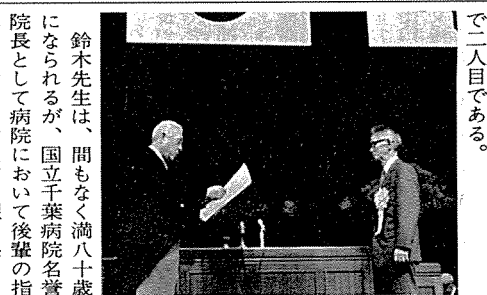
普及に甚力している。鈴木先生は、昭和三年、千葉県対がん協会の設立以来理事として協会の育成に務め、昭和四一年県対がん対策審議会会長に就任され、施設拡充のために県、その他関係方面に訴え、募金活動に精魂を傾けて昭和四五年協会会館建設に運び、協会の基礎を確立した。さらには県立がんセンターの設立に甚力され、千葉県のガン対策推進に寄与されたことが認められたものである。他に武田勝男北大名誉教授、布施信良国立大阪病院名誉院長等九氏、六団体も同時に表彰された。なお、昭和五十年には本会名誉会長故花岡和夫先生も表彰の栄に浴しており、花岡先生に次いで二人目である。

鈴木 五郎先生 日本対がん協会賞を受賞

去る九月一日、本会名誉会長鈴木五郎先生は、創立二十周年を迎えた財団日本対がん協会の本年度ガ

ン協会賞受賞の栄に輝いた。この協会は、国民の善意に基づく寄附金を基にガン知識の啓発と検診の

鈴木先生は、昭和三年、千葉県対がん協会の設立以来理事として協会の育成に務め、昭和四一年県対がん対策審議会会長に就任され、施設拡充のために県、その他関係方面に訴え、募金活動に精魂を傾けて昭和四五年協会会館建設に運び、協会の基礎を確立した。さらには県立がんセンターの設立に甚力され、千葉県のガン対策推進に寄与されたことが認められたものである。他に武田勝男北大名誉教授、布施信良国立大阪病院名誉院長等九氏、六団体も同時に表彰された。なお、昭和五十年には本会名誉会長故花岡和夫先生も表彰の栄に浴しており、花岡先生に次いで二人目である。



思想家としても知られ、青年期より半生をバリですすした人の人生観は印象的であった。

鈴木先生は、間もなく満八十歳になられるが、国立千葉病院名誉院長として病院において後輩の指導に精励され、又、日曜日毎には御趣味の乗馬を楽しまれる等お元気に活躍されておられる。

千葉医科大学(昭十二卒) 卒業四十周年記念クラス会の記

—五十二・十一・二十七—

私共昭和十二年卒業のクラスは在学中から、入学年度に因んで「昭八会」と称し、現在までこの名を通して、いる。本会報第63号の「クラス会名に御注意を!!」の意に添わぬが、この点は御了承を願いたい。

昭和五十二年晩秋、十一月二十七日、東京上野頤松亭に於いて、昭八会クラス会をひらいた。従来クラスのために大変尽力して下さい、昭和三十三年には「医者になつて20年」と言う記念アルバムを一人で作って下さった若林 巖君をはじめ、高田 進君、西川賢郎君、奥山正次君が三、四年の間に物故されたのは真に痛恨の極みで、会のはじめに一同心からなる黙祷を捧げた。

卒業四十周年ともなれば、クラスの面々大分白髪もふえて老境に入りかけた感じではあるが、会えば忽ち昔日の若い気分に戻り、杯を傾け怪気焰をあげて、楽しいクラス会であった。綿貫名誉教授が所用のため参加されなかったのは残念であったが、遠く札幌から馳せ参じた水野秀一君、名古屋からの佳田満也君が元氣な顔を見せて、総勢二十三名。秀逸は陶芸家はだしの鈴木 敏君が自作の茶碗(寿昭八会 四十年の文字入り)を一人に二個づつ記念品として配布して下さいと、奥さんと一緒にお茶を……との温かい心遣いには一同感謝感激であった。

明年は千葉大学新病院の落成を祝って、千葉でクラス会を開くこ

写真

前列左より

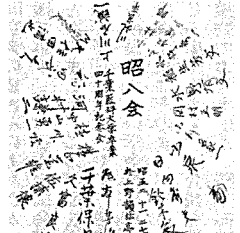
小泉 寿・千葉保次・佳田満也
鈴木 敏・中山勇一・植竹 順
稲田武夫
中列左より

久富良次・小川象一・川島正夫
横山達雄・稲生芳文・小林二郎
河村謙二
後列左より

水野有文・岡村正明・佐藤 譲
日向秀夫・川北良平・尾本芳次
小松源二・上川名誠・水野秀一
(久富 記)



昭和36年卒・さんろく会



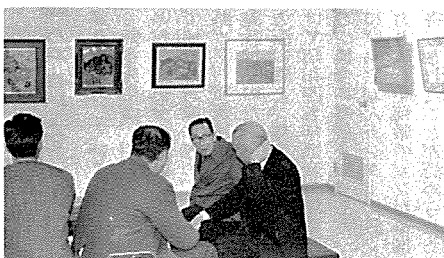
昭和53年3月18日(土)千葉で、ダリアサロンで、午後6時から36年卒同級会、別名さんろく会を開催した。昨年3月に続いて、第5回目の会である。今回はこれまでと異り、同級生全員への連絡がいきわたつたので、相当参加が予想されたが、79名中、43名の出席という事は、中堅どころで活躍している忙しさが反映した模様である。形成外科学会が東京で開かれていたので、遠来の今野昭義君(秋田大耳鼻科助教授)をはじめ、近藤省三君(昭和和大形成外科助教授)・三宅伊予子君(順天堂大形成外科講師)が連れ立って参会したが、西の遠くは、辺地医療の理想を求めて愛知県東栄町で活躍している小倉敬一君がかけつけて旧交を暖めていた。千葉大学医学部の現況を長谷川修司君(大脳研助教授)が紹介し、又、自称院長代理の小越章平君(高知医大外科助教授予定)が、三月開院したばかりの新病院をユーモアたっぷりに紹介し、会を盛り上げてくれた。

する。②会費は一万円とし、年会費とせず、活動費がなくなつたらそのつど一万円を追加徴収する。③本年12月にさんろく会機関誌第二号を作成する。④さんろく会の次回には東京で開催する。⑤本年8月12日(土)館山京成ホテルで一泊し、翌日、房州CCCでゴルフコンペを行う。

(幹事 諏訪部博・青木謹 記)
(編集部注)さんろく会報1・2号の寄贈を感謝します。

第二回るのはな美術展開催さる
52年11月26日(土)30日

山では落葉松があめ色となり、都会の舗道では銀杏が黄色く色づいてはら／＼と散る十一月の末、二十六日より五日間、東京駅八重洲口前の清潔な感じのする横町ギヤラリに於て開催された。出品者は28名の多数にのぼり、二十六日夕、出品者以外の先生方も参加されオープニングパーティーが盛会裡におこなわれた。風光明媚なのはな台上に夢多い学生生活を送つた先輩達の中から多くの美術の愛好者、画家が育つてきて居り殊に白鯨社の存在が刺激剤となつていたのであろうし、画を受する嶋田名誉会長の明察と情熱が第一回の中核を成すべく、今日つながれて運が盛り上がり、今日つながれてい。今年は簡井先生の御好意により、伊東彌恵治教授の遺作が陳列され、又最近油彩をはじめられという佐藤清松先生(大14卒)



会場風景

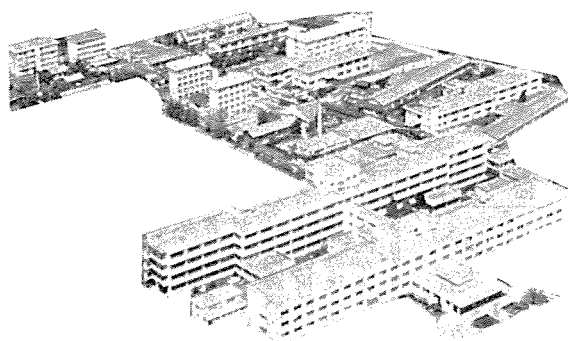
11年余の永きにわたり、千葉大学医学部附属病院薬剤部長として活躍されていた永瀬一郎氏は昭和53年8月1日付で退任、東京通信病院に転出された。

永瀬氏は昭和19年東大医学部薬学科を卒業、国立東京第一病院、関東通信病院を経て、新潟大学医学部附属病院、東京大学医学部附属病院の各薬剤部長を歴任され、昭和42年4月本学附属病院に着任された。ご在任中は薬剤部の運営、発展に尽力される一方、医薬品情報室の設立、院内処方集の大改訂などに努力を傾注され、大きな功績を残された。

なお後任決定までは佐藤博病院長が職務を兼任されるが、薬学系大学院設置予定に関連し、今後薬剤部長がその教官を兼務する可能性もあつて、後任選考には慎重な検討が加えられることになった。

すめ、井上通(昭24)白水阿弥陀堂安岡陽三(昭25)初秋の庭、仲村長正(昭29)バグサンファンの下り、山口庚児昭(昭31)日曜の午後、李保文彦(昭31)鶴雲、長谷川鎮雄(昭35)石垣、塚田隆憲(昭39)夏の伊豆。

問合せや紹介の必要な場合は、るのはな美術展事務所〒160東京都新宿区高田馬場一ノ二五ノ二九石谷医院内Ⅱ(二〇〇)〇七八迄(文責 T・I 先)



国立千葉病院だより

院長 齋藤 弘

我が国立千葉病院は、千葉市街の東北部、椿森の高台にあり、銚子方面へ走る総武本線の鉄道を隔て、亥鼻台の上に聳え立つ新築成った白亜の本学附属病院と相対し、西南方は市の繁華街を経て遠く京葉工業地帯、東京湾を望んでいる。周囲は比較的緑に恵まれた住宅地の閑静な、づまいの中にある。交通も割合便利で、国鉄又は京成千葉駅よりバスを利用して約十分の行程であり、全県下を診療圏として持っている総合病院である。その生立ちは、昭和20年12月に陸軍病院より厚生省に移管された

病院であって、敗戦直後の混乱時に、鈴木五郎、三輪清三先生を院長及び副院長として頂点に戴き、旧軍医の方々に加え本学より数名の医師の赴任を得て発足した。当時は三百床余の病院であり、外来患者数も百名前後であった。以後順調に規模を拡大し、経済状態の復興と共に近代病院への脱皮を計り、今年度をもつて略、全建造物の不燃化が完成した。現在、一般病床四六七床、結核五〇床、精神三三床である。医員数は、定員、非常勤を含め五三名で、一八の診療科及研究検査科に分れて診療に

従事している。本学の出身者は三六名で、その内、医長として、内科、加藤二郎(昭29)、鈴木裕太(昭30)、森博志(昭31)、御園生正紀(昭41)、精神神経科、西川嘉作(昭30)、循環器科、田宮達夫(昭27)、小児科、森和夫(昭26)、溝口勝(昭41)、外科、伊藤力(昭23)、西沢直(昭37)、整形外科、松本秀夫(昭25)、脳神経外科、佐々木徳秀(昭41)、皮膚科、青木芳郎(昭16・12)、泌尿器科、石川堯夫(昭34)、産婦人科、岩津英雄(昭26)、眼科、窪田淑子(昭29)、耳鼻咽喉科、山口宗彦(昭38)、麻酔科、伊東和人(昭23)、放射線科、高瀬潤一(昭17)、研究検査科、川上仁(昭24)、以上の諸氏が担当している。其の上に、事実上の病院創始者であり、今日の基礎造りをされた鈴木五郎先生(大11)、又それを発展完成に導かれた湯田好一先生(昭11)、を名譽院長として戴き、御指導を賜っている。

我が病院の特色とするところは、診療科に優劣を付けることなく、万遍なく地域の要望に答え得る高度の内容をもった医療が出来ることを目標に掲げて充実を計つて来た点である。その中でも、癌、心臓、救急医療に関しては積極的にこれと取組んでいる他、臨床研修病院としても活動している。この程度の病院ならではの、小廻りの効く利点を充分活用して、横の連絡を緊密に取ることを心掛けている。

同窓諸賢の絶えない、御後援と御鞭達とをお願いいたします。

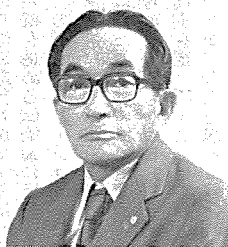
(筆者 昭21卒)

埼玉県深谷市赤病院だより

外科部長 篠原 治人

昭和52年4月、待望久しかった新病院が完成し、近代的設備をもった地方病院として職員一同専心診療を行つています。

場所……埼玉県北部、国鉄高崎線深谷市にある。人口約7万、上野駅から電車で約1時間半、周りに赤城・榛名・秩父の山々が美しく、秋から冬になると更に浅間・谷川・日光連山が白く眺望でき、暮らし易い所である。



高木 紹夫院長

沿革……昭和25年、当時の深谷町外11ヶ村の公立深谷病院が日本赤十字社埼玉県支部に移管、赤十字病院として開設される。其の後幾多先輩の御努力により、本年4月移転新築業に至つた。

ベッド数・設備……一般病床300床、伝染病床40床、設備器械のうち特に留意された点は、

- a、放射線科、各種X線検査装置、シネアンギオ、RI設備、EMIスキャン等
- b、検査部設備、テクニコン自動検査装置等
- c、手術部設備、テレビによる教育設備等

d、救急部門設備、屋上ヘリポート設備等

e、CIU設備

f、人工透析部門設備

g、運動機能訓練設備

等の充実である。埼玉県北部は群馬と東京方面にはさまれた、医療の谷間を感じる処で、近代設備をもった総合病院は、本院の外にはなく、現在研修病院として申請中である。

医員構成……常勤医師約30名の他10名、本学出身者は、院長内科、高木紹夫(昭23)、外科、篠原治人(昭25)、田口勝(昭34)、松山迪也(昭35)、足立英雄(昭43)他、第一外科出張者2名、皮膚泌尿科奈良林定(昭25専)、眼科、金木良夫(昭42)療養中。

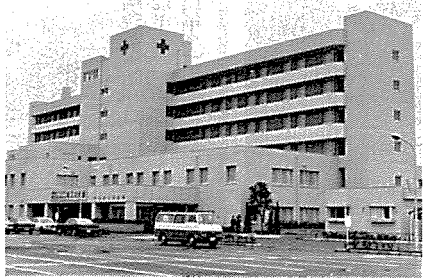
大学から第一外科・泌尿科・放射線科等の応援をうけている。医師は土地柄群馬大学出身者が多く、他は新潟大学、慈恵医大、札幌医大等で、今後も各科いろいろの大学出身者による混成で運営されるようである。

病院の今後進むべき途は種々考えられる。後輩諸君に敢て申し上げるならば、医学の勉強は卒業後大学に残つてやるのが一般的な考えである。しかし地方病院には、大学ではやり難い実際の面白い面も多いので、診療の中から貴重なものも拾い集め、積み重ねていくのも一つの勉強法であろう。

出来上つたものは既にそのままで古くなっていく。常に進歩を求め止まない医療を実践していくために、日本の医療に困難な問題は沢山あるので、ある時期は苦しくとも、特に若い人は、パイオニアたんとする気概が必要である。大学とも関係をもつて、研究面でも意欲をもつていきたいと皆で努力しております。是非若い元氣な諸君の来院さんことを切望して止みません。

ユニークな本院を作り上げた高木院長は、古人になられたが、東京大学教授であり、横浜医科大学長として有名な高木逸磨先生の御子息で、その御遺志を継がれ、日本の医療、医政に非常に情熱を燃やしておられ、千葉大学の先輩として、傑出した人物の一人と感じている。話は面白いし、型にはまらず、実践医療の面で苦勞してこられた経験は、後輩諸君にとつて、御指導を得るならば、将来に極めて有益なものであると信じます。

(筆者 昭25卒)



看護学校開校三十周年を祝って

校長 牧野博安

(昭25卒・脳神経外科・教授)

昭和五十二年十一月五日(土)の秋、晴れに恵まれた爽やかな日の下に、香月学長、佐藤病院長、小林県医師会長、看護学部長、教育学部長、人文学部長、事務局長等多数の来賓の列席をえて、看護学校開校三十周年の式典が施行された。記念講堂には、約三百人の華やかに着飾った同窓生と在校生が三十年の伝統を誇る本校をなごやかな雰囲気の中で、懐かしく振り返り、旧古を暖めると共に今後の発展への一つの区切りをつける意味でも有意義な集まりであった。千葉大学は、新しく看護学部が創設され、今後の本邦における看護教育の中心的存在になることは、明白なことであり、本学における看護教育がどのように発展して行くかは注目を浴びているところであるが、本校は、過去三十年、さらに県立病院附属看護学校時代を含めればもっと古くから、千葉県における医療の中枢をなしてきた、看護



評書

パリ病院

一七九四—一八四八
アッカークネヒト著
館野之男訳 思索社

この本は表題に示されるように現在の千葉市と同規模の一都市におけるわずかに五十五年間の医学の変貌を取り扱っている。しかし、この時代のパリはフランス革命、ナポレオン帝国、王制復古時代へと続くめまぐるしい社会的変革期に当り、全世界の文化と思想の中心にあったことを考えると、ここが現代医学の生まれるためのあらゆる実験のつぼとなつたことは不思議でない。著者のアッカークネヒトはこの時代の医学を病院の医学と名付け、それ以前の書斎の医学、それ以後の研究室の医学と区別しているが、ここでは革新過激派から保守反動派に至るまでのすべての医学思想が論議された反面、「若い人が医者になりたいと思つたらその日からすぐ病院へ行くべきだ」というトルソの言葉に

の教育をどうやって行くかの課題を担うて行く面では本校のあり方が、今迄千葉大学医学部附属病院へのナースの供給源としてという立場から、一歩前進すべきことが、感ぜさせられた有意義な集りとなつた。本校の教育面において、貢獻の深かった先生方二十名に感謝状と記念品を贈呈し、労をねぎらつて式典を終了したが、その後、特別講演として、直木賞受賞者である作家の井上ひさし氏による「私の仕事、あなたがたの仕事」と

いう題のくだけた話を一時間拝聴した。医療に関する一面を、社会人の立場から諷刺を含めて鋭く、つかれた有意義な講演であつた。祝賀会はホワイエで行われ、女性集団の学校にふさわしい、なごやかで、しかも華やかに楽しい一時を、多数の列席者の祝辞をいだいて、過すことが出来た。本校の今後がどうあるべきかは別として、今迄の本学医療圏の一翼をになつている人々の楽しい式典であつたことを報告する。

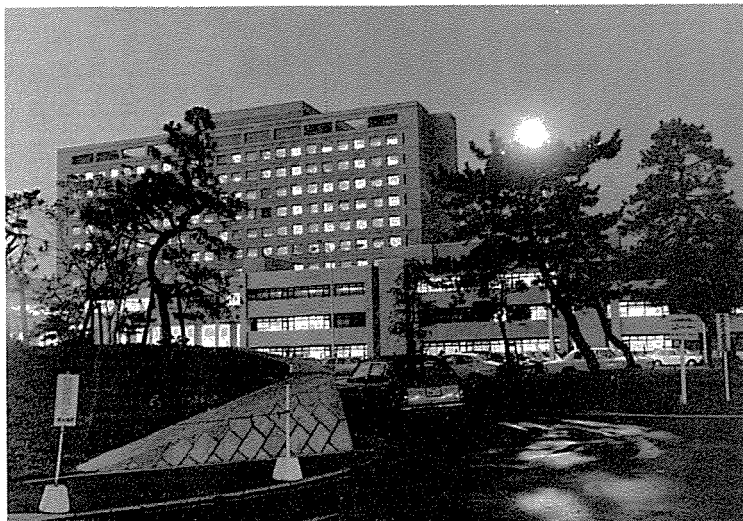
代表されるようにより具体的に実践的な医学が重じられた。医学校や医師免許制の廃止が叫ばれた一方で、現代医学の源流となるものもろの萌芽、病院の設立、下水、給水設備を中心とする公衆衛生の改善、医学教育の制度化、病理解剖、血液化学、顕微鏡検査の開始、医学会の設立、医学新聞・雑誌の発刊、専門医への分岐、児童衛生や精神衛生発達、聴診器の発明、気管切開術や静脈注射法の開発があつた。

なかでも興味深いのは、この時代の最大の災厄であつたペストやコレラなどの流行病に対する一節である。もし病気が社会的理由を持つとすれば、またもし自由な状態が最良の社会状態であるとすれば、健康もまた自由のもとで最良であるはずである。このような立

叙勲

昭和53年度叙勲

藍綬褒章 三宅和夫氏(茨城県西病院長・昭和21年卒)
勲四等瑞宝章 小林二郎氏(昭和12年卒)
勲五等瑞宝章 本田保三氏(昭和14年卒)



業務を開始して10ヵ月をへた新病院。
昼の景観とは別に灯のともった姿も美しい。

計報

●52年12月27日、県立佐原病院長、二宮一氏(昭23卒)
●53年1月22日、岩動洋二氏(昭

22卒)
●53年4月30日、元医学部事務長補佐 竹内幸明氏(多年るのはな同窓会の事務をたすけて下さった同氏の御冥福を切に祈ります。)